

博物館

ニュース

安祥文化のさと

Anjo City Museum of History

2015.10
No.98



都築弥厚銅像（和泉町弥厚公園内）

安城市歴史博物館

会期：平成27年11月7日(土)～平成28年1月24日(日)



1 都築弥厚画像(明治川神社蔵)

安城市の歴史で最も重要な出来事の一つに、明治13年(1880)の明治用水完成が挙げられます。その明治用水完成より約50年前に、碧海台地に用水路を造り、新開(新たな耕地を開発すること)して実りある台地に変えようとする発想を持ち、それを計画した人物がいました。その人物こそ、都築弥厚その人です。今年が弥厚生誕250周年です。本館では特別展として、弥厚の実像を明らかにした展示を行います。

弥厚さんの伝説

ここでは親しみを込めて弥厚さんと表記します。

弥厚さんが用水路と新開の計画書を提出したのは、63歳の時、文政10年(1827)のことです。矢作川の上流から取水して、碧海台地を南北に2本の用水路を通す、という当時とてつもない大事業でした。翌々12年(1829)には幕府の役人の見分(実況検分)を行い、天保3年(1832)に再度見分が行われ、それをもとにして翌天保4年(1833)に幕府から新開地の一部許可が下りました。しかし、その半年後に弥厚さんは死去してしまいました。享年69歳でした。

弥厚さんは安城市民にとっては偉人として語られています。一般に知られている弥厚さんの業績や言い伝えを紹介します。

明治用水の基となる計画をした。私財をなげうっ

て、農民のために開発をした。耕地を増やして米を生産し、その米を酒造りに利用しようとした。武士となって陣屋の代官になった。和泉村から江戸に行くときには大名のような随行員を連れていった。すばらしい計画なのに農民は知識がなかったために反対した。そして用水路の測量中に農民が邪魔をした。領主たちも領地が増える訳ではないので反対した。そのために計画は難航し、志し半ばで弥厚さんは死去した。開発許可が下りたのは、予定の20分の1(予定開発地が約4,000haのうち205ha)の土地だけで、そのため弥厚さんは落胆した。弥厚さんが死去したころ、弥厚家は極貧状態であった。

果たして、弥厚さんのこれら伝説はいつ、どこから語られるようになったのでしょうか。

弥厚さんの知られていないこと

弥厚さんのことが書かれた本は、今から約100年前の大正8年(1919)に刊行された『弥厚翁』です。その後、この本を元にして、さまざまな弥厚さん像を語った本が出てきます。研究書としては、『明治用水』という昭和28年(1953)に刊行された書物があり、明治用水完成までの歴史の中で、弥厚さんの業績が評価されています。しかしその後50年近く新たな研究はされていません。弥厚さんのことで語られていることからは、『弥厚翁』以降の諸本から派生したものです。その中には誤解から生まれた伝説がいくつもあります。今回の展示のための調査において、弥厚さんに関することや、その周辺の状況が解明されつつあります。その中からいくつか取り上げます。

“弥厚の用水路計画は明治用水の計画ではない”

弥厚さんが矢作川の上流から用水路を引いた場所は、今でも残る「用水新開計画巡見案内図」を見ても明らかです。ここには弥厚さんの計画した用水路すべてが表されていません(図2・3)。この図の取水口は明治用水の頭首工より上流にあります。そして現在の豊田市中心部の低い部分を避けながら西の高みを通り、碧海台地の標高が高い部分まで通して、碧海台地が平坦になる部分、つまり現在の安城市域を中心に用水路を通して見ると、



2 用水新開計画巡見案内図 (明治用水会館蔵)

と、弥厚さんの計画は現在矢作川の越戸ダムから取水している枝下用水の経路と明治用水がドッキングした計画になっています。幕府に提出した計画願書には「加茂・碧海両郡」とあって、現在の豊田市から碧海五市の計画を目指していました。つまり弥厚さんは明治用水だけではなく、枝下用水をも加えた大計画を考えていたのです。

“計画に反対した農民たちにも生活がある”

農民たちは、弥厚さんが計画した用水路ができる
と昔からの田んぼの水が増えてしまい生産力が落ちて
てしまうと考える反対したとされます。昔からの田
んぼは低いところにあり、水がある場所だからこそ
昔から大切にされてきました。安城市域の村々は



3 用水新開計画巡見案内図トレース

碧海台地の東に多くあり、矢作川沿いの沖積平野に多くの田んぼがありました。当時、台地沿いを流れる鹿乗川は現在の木戸町辺りで矢作川に合流していましたが、矢作川の水位が高くなり、排水がうまくできていませんでした。特に小川村や桜井村では合流地点を矢作川の下流に付け替えようとしていました。

それに加えて、弥厚さんの開発予定の土地は決して不毛の地ではなく、農民にとっては、松を植林し、草や枝などをと

り、田んぼの肥料や生活に必要な燃料としていました。その土地に田んぼができると、肥料や燃料を購入しなくてはなりません。農民は今の生活をどうにか維持することが大切であったので、反対したくなるのも当然でした。弥厚さんはそれを熟知していて、開発地の供出の交渉ではすべての土地を求めていません。予定の半分とか数割分の土地の開発を考えていました。つまり“開発がはじめて許可され、これから交渉して多くの土地の開発に乗り出そうとしていた”のです。

このように、弥厚さんの業績をきちんと見たり、弥厚さんとは違う立場の人達の考えを誤りと即断せず、当時の社会的状況を踏まえて見る必要があるのです。

この特別展では、弥厚さんの偉業だけではなく、調査で明らかになった様々な弥厚さんの実像にせまり、弥厚さんの半生や文化活動、そして彼の親類、一族や和泉村などの周辺、背景についても展示します。新たな弥厚さんの姿にご期待ください。

(三島一信)



〔図1〕 天保3年（1832）小川村絵図：本館蔵

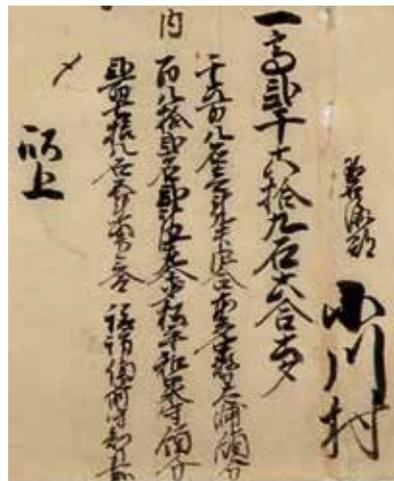
今回は天保3年に描かれた小川村絵図をもとに、安城市南部に位置する小川町を歩いてみたいと思います

歩く前に、少し絵図を詳しく見てみましょう。

左下にある文字Aからは、この絵図が天保3年に幕府が行った国高改の巡見の際に描かれたものである事が分かります。幕府はこの前年（天保2年）11月に、諸国総石高調査のために、村高を記した帳簿の提出を命じているのです。

絵図の上が北で桜井境になっています。現在小川町の北は姫小川町になっていますが、この絵図を見ると、芝山とか遠見塚とかいった現在姫小川町に含まれる地名が書かれています。姫小川村は天明2年（1782）に成立したことが伝えられていますが、この時の調査では、小川村に含まれていた事が分かります。東には矢作川が流れています。西は、中根村や五ヶ村入会地に接し、南は藤井村、木戸村、野寺村に接しています。

絵図の中央上に、逆向きに書かれた文字Bがあります。その部分には小川村の総石高が書かれていま



〔図2〕 文字B部分を拡大したもの

す。この時の小川村の石高は全部で2,069石6合6勺であり、その内1,608石1斗9升4合が本多中務太輔領分、182石2斗4升9合余が松平和泉守領分、278石5斗6升3合が諏訪備前守知行所分であると書いてあります。小川村はこの当時3人の領主の支配を受け、年貢を納めていた事が分かります。こうした複数の領主の支配を受けていた村を相給の村といい、桜井村の場合は6人ないし7人もの領主の支配を受けていました。

ちなみに、本多は岡崎藩、松平は西尾藩、諏訪は永良（現西尾市下永良町）に陣屋を構える旗本でし

た。そして、それぞれの領主に応じて庄屋や組頭といった村役人もいたのです。

話を絵図に戻します。

村の東には藍色で矢作川が描かれています。また、矢作川に沿うように堤を兼ねた道が赤茶色で描かれています。中央からやや右寄りに、南北にほぼまっすぐ藍色で描かれているのは河乗川(鹿乗川)です。

河乗川と矢作川の間には、矢作川に近い方に黄色で表された畑、河乗川に近い方には着色されていない田んぼが広がっています。印象的なのは、田の所々に四角く黄色い部分が描かれていることです。この地域の沖積平野によく見られた島畑です。このあたりは全体的に矢作川に近い方の土地が高く、河乗川に向けて徐々に低くなっている様子が見て取れます。矢作川沿いには畑に取り囲まれるように集落が描かれています。北から、大帳、福地、天神、小向の集落です。

河乗川のすぐ西、真ん中あたりに上小川、下小川の集落が描かれています。上小川と下小川の中程に描かれている寺は蓮泉寺でしょう。桜井境に描かれた集落は、姫小川の集落に当たると思われますが、地名は書かれていません。薬王と寺が描かれていますが、これは現在浅間神社の境内にある薬師堂と誓願寺に当たるものと思われます。獅子塚という文字がみえますが、これは後から貼られた付箋に書かれたものです。それに、獅子塚は現在東町のうちにありますから、付箋の意味はよく分かりません。

寺領村境に岩根の集落があります。ここだけ岩根村と「村」がつけられていますが、この意味もよく分かりません。岩根の東の河乗川は川幅が広がっています。

河乗川の西は碧海台地にあたり、小川の集落、そのまわりの畑、そしてさらに薄墨色で表された山が広がります。絵図の中央を北から南南西方向に広い道が描かれています。これは「岡崎ヨリ大浜道」です。桜井の西町、東町から南下し、米津方面に続



〔写真1〕 図1の①辺りから撮った現在の小川町御林交差点付近

く、当時の幹線道路です。この道は現在の主要地方道岡崎西尾線の道筋に当たります。この道路に隣接して、図の中央あたりに、西尾領御林と岡崎領御林が併存しています。写真1の右奥あたりに御林があったこととなります。この辺りにはかつて、金政、北三ツ塚、中三ツ塚、南門原、北久手、西久手とかいった小字がありましたが、昭和47年(1972)から50年にかけて現在の小川町御林という新しい字名に統合されました。その際、かつての御林の存在がこの新しい字名に反映されたのでしょうか。

この「岡崎ヨリ大浜道」の西側は大部分が「山」です。御林から西に進む道は、山田新田の南を通過して和泉へと続く道です。台地から西乃川(朝鮮川)の開析谷に下ったところに橋Cが描かれていますが、昭和42年にアイシン精機西尾工場が進出し、朝鮮川から西の和泉道はその工場用地に包含されてしまいました。それまでは、小川と和泉を結ぶ道として使われていたのです。

この絵図よりうんと時代はさかのぼりますが、和泉に住んでいた石川丈山が孫介と呼ばれた4歳の頃、野寺のお寺まで歩いた道というのはこの橋を通る道筋だったのかもしれませんが。



〔写真2〕 図1の②辺りから撮ったかつての和泉道：細い道は朝鮮川へと下り、今でもコンクリートの橋が架かっている。橋の先はアイシン精機の駐車場になっている。

山田新田は現在の山中の集落です。山田新田の集落まわりの台地上には畑が広がり、集落の北から西にかけて西乃川の開析谷には田が広がっています。谷の最上流部には、堤で区切られ藍色で表された溜池が見られます。さらに溜池の後背部には薄青色に着色された久手(低湿な土地、沼などのように水草の生えた地)が描かれており、当時の土地の様子を具体的に描いた絵図であることがよく分かります。

参考文献等：『小川の歴史をさぐる』小川町郷土史刊行会、『安城の地名』安城の歴史を学ぶ会編、『地籍字分全図小川村』明治17、『2万分の一地形図』明治23陸地測量部

長州征伐に赴いた安城村の歩兵 (2)

博物館ニュースNo.96でご紹介しました長州征伐に従軍した安城村の柳助について、今回は柳助が記した従軍記録をご紹介します。

元治元年(1864)の長州征伐では、諸藩からの15万を越える軍兵が長州藩を取り囲みました。長州藩は幕府に恭順しようと国家老等(くにがらう)を自害させ、幕府軍の攻撃から免れました。

しかし幕府は、慶応元年(1865)5月にまた長州を征伐、いわゆる第二次長州征伐の命令を出しました。

西丸下歩兵隊の柳助たち兵賦(へいぶ) (歩兵のこと) は、長州征伐の命令を受けて5月5日に江戸を出発しました。

柳助の従軍記録「長州征伐御用中日記」には江戸と長州を旅した宿の記録や逗留地での訓練、長州での戦争について記されています。

江戸を出た当初は淡々と宿の記録をしていましたが、関西へ入るころには、宿の記録だけではなく関ヶ原宿の古戦場首切塚、醒井宿名物の醒井餅(かき餅)や近江の湖(琵琶湖)の竹生島など、見聞きしたことなども書いています。一行は京都を過ぎ閏5月4日に大坂へ入りました。

兵賦達は大坂で戦に備えて訓練をしていました。閏5月24日には京都で参内した将軍家茂も大坂へ入り、将軍や御三家の上覧の訓練などもありました。将軍のお供として京都に行くこともあり、柳助の記録には東福寺(京都市東山区)へ参詣したことが見えます。11月15日には将軍の広島行きに従いました。

しかし、長州征伐の命令を受けながらも征伐は中々行われず、年が明け慶応2年3月に柳助たち兵賦は再び広島へ向かい、安芸国江波(広島市)という島で訓練に入りました。長引くせいか、江波において兵賦の中には逃亡や女を連れて駆け落ちする者がでたと柳助は記録しています。

幕府は長州藩へ藩主毛利敬親と世継の蟄居(ちつきよ)、10万石の削封(さくほう) (減封)を要求しました。しかし、薩長同盟をした長州藩は交渉に応じず、同年5月29日の交渉期限を無視したことにより幕府の攻撃が始まりました。



写真1 長州征伐御用中日記

6月8日、柳助たち西丸下歩兵隊は幕府の蒸気船八雲丸で周防大島(山口県周防大島町)へ向かい砲撃します。柳助の記録には奇兵隊が周防大島を警護しているとあります。幕府軍は八雲丸ほか富士山丸・翔鶴丸の蒸気船や帆船の旭日丸で周防大島へ向かいました。実際には長州藩は周防大島の警護を重視しなかったため奇兵隊の警護はなく、西丸下歩兵隊や幕府の命を受けた松山藩は11日に上陸すると村々をすぐに占領しました。しかし、12日夜、高杉晋作率いる奇兵隊の蒸気船丙寅丸(へいゐんまる)が停泊中の幕府軍の軍艦に砲撃、その後第二奇兵隊が乗り込んで戦闘となり、幕府軍は敗退していきました。数日間の戦の中で柳助も左手足にかすり傷を受けたと記録にあります。その後も下関や小倉で幕府側の諸藩は敗戦し、停滞したまま、将軍家茂の薨去(こうきょ)により、8月7日長州征伐は停戦となりました。

柳助たち西丸下歩兵隊は広島で逗留した後、船で兵庫港(神戸市)まで行き、大坂に出て東海道を下りました。10月12日に品川宿に到着したところまで記録しています。

翌慶応3年3月、柳助たち最初に入った兵賦達は5年の任期を終えました(実質満4年4か月)。柳助は兵賦になってから出向いた諸国28か国の宿場、昼飯177宿、宿泊189宿の名前を明確に記録しています。これらは、直後に書かれたと思われるものと後年整理してまとめられたものがあり、残された資料に何度か同じ記述がありました。

前回紹介した木札や鉄砲玉を持って三河へ帰国した柳助は、その後安城村の久永石見守の陣屋で勤め、まもなく明治を迎えました。(水谷令子)



写真2 「長州征伐御用中日記」より6月8日蒸気船で周防大島へ向かった時の日記、「騎兵隊(奇兵隊)」の名前が見えます

(平成27年度上半期)

常設展示室、 展示替えしました

開催期間がいつからいつまで、と決まっている展覧会に対して、「いつも開いています」というのが常設展示です。博物館の「素顔」と思えばよいでしょうか。地味けれども、博物館の「地」がでてしまうのが、常設展示なのです。そんなことを肝に銘じながら、今年度も計画的に常設展の展示替えを行っています。4月には「三河真宗」、7月には「新美南吉」、8月には「一向一揆」、9月には「古代集落」、合計4か所を、お配りしている「催し物案内」の予告どおりに実施してきました。



一光三尊仏絵伝第二幅部分
後の善光寺本尊が「難波の堀江」に捨てられる場面

今年は、善光寺(長野県長野市)のご開帳(数え年で7年に一度)にあたり、その分身仏を本尊とする高田専修寺(栃木県真岡市)もご開帳(こちらは17年に一度)の年でした。このため「三河真宗」のコーナーでは、善光寺や高田専修寺と真宗の関係をクローズアップし、一光三尊仏絵伝(江戸時代、全四幅)などを展示しました。常設展示では初公開です。

7月30日は、日本を代表する童話作家新美南吉の誕生日です。これにあわせて常設展示も一部資料を入れ替えました。特に富士登山の折に描かれた画帖「六根晴天」は、南吉の絵のセンスがうかがえる貴重なものです。童話とはちがった南吉の一面がみえ



画帖「六根晴天」
南吉の書いた部分を広げています



『三河物語』写本
三河一向一揆の記述がある部分は矢印で示しています

てきそうです。他にも教え子と一緒に作った詩集6冊のうちの一つも並んでいます。安城時代の南吉を象徴するような資料です。

「一向一揆」のコーナーは、7月まで開催していた特別展で大きく取り上げた戦国時代の本證寺を紹介するコーナーです。おなじみの伽藍絵図(複製)が常設展示にもどってきました。手前に展示されている『三河物語』は、常設展初出品です。

安城市内の遺跡は、弥生時代や古墳時代のものが目立ちますが、奈良時代や平安時代の集落跡もあちこちで見つかっています。今回の展示替えでは、これまで並んでいた墨書土器を一新して、桜林遺跡(桜井町)のものを出しました。「酒杯」と書くとかかりやすいものもあれば、謎の渦巻き模様を描いたものもあります。単に文字を書くだけではない、何かの思いや願いをこめた証拠であることを思わせませす。加美遺跡(小川町)の竈形土器は、移動式の竈です。祭祀用に使用した例も確認されているので、この土器も何かの儀式に使ったのかもかもしれません。これも常設展初出品です。



竈形土器(加美遺跡出土)
三河地方で確認できる唯一の付け底の竈です

そんなわけで、今年度の展示替えは、初出品の目白押しです。次はいつ出てくるのかわかりません。常設展示は200円、特別展の観覧券には常設展の半券も付いています(中学生以下は無料)。この機会をお見のがしのないよう、ぜひご来館ください。

(天野信治)

夏休み子ども向け行事報告

歴史博物館では、夏休みに小中学生対象にした行事を開催しました。その様子を報告します。

夏休み自由研究相談会

7月29日(木)～8月1日(土) 午前10時～午後3時

学芸員が、夏休みの自由研究を歴史や考古で考えている小中学生の相談に応じる「自由研究相談会」。昨年からはじめて、今年で2回目になります。今年は土曜日を1日増やして3日間開催とし、また、学芸員が準備をした上で対応できるよう、事前予約を取り入れるなど、より多くの相談者が来てくれるよう工夫を加えました。

その結果、今年は昨年を大きく上回る数の相談者が訪れました。相談者の多くは事前にテーマを決めており、自由研究に対する意欲を感じました。

相談者が選んだテーマには、自分が住む地域の地名の由来を調べたい、安城市内の史跡についてまとめたいなど、身近な歴史に関するものから、今年が徳川家康薨去から400年目であることから、関ヶ原の合戦について調べたいというものや、百人一首の歴史についてなど、多岐にわたりました。こうしたテーマについて、学芸員が参考になる本や施設を紹介したり、調べた内容のまとめ方をアドバイスしたりしました。素朴ながらも答えるのが難しい質問も多く、学芸員も四苦八苦しながらも全力で対応していました。



相談風景。親子での参加者も多かったです



参考として、昨年の入賞者の作品も会場に展示しました

夏休み子ども歴博探検隊

8月5日(水) 午後2時～午後4時

博物館の活動には、展覧会や講座開催のほかに、資料の収集・整理・保存・研究など、普段は目に触れることのないものもあります。「子ども歴博探検隊」は、そうした普段公開していない活動の場を子どもたちに紹介し、博物館に興味をもってもらうことを目的とした催しです。

当日は小学校4年生から中学校1年生まで、様々な学年の子どもたちが参加しました。まずは「博物館の裏側探検」と称して、資料専用の搬入口や、資料を害する恐れのある虫やカビを殺すためのくん蒸庫、資料整理室、資料専用のエレベーターなどを紹介するとともに、資料が博物館に搬入されてから清掃、目録取りを経て展示室に並ぶまでの流れを説明しました。各施設の役割等の説明にみんな興味津々でしたが、特に搬入口に設けられた資料運搬用のリフトやくん蒸庫に関心を持ったようです。



くん蒸庫の見学

その後、4つの収蔵庫から、主に民具資料を保管している第3収蔵庫の探検、明治～昭和期に使われた資料について、使い方などを調べました。昔の生活道具は子どもたちにとって見慣れないもので、本で調べても、使い方を実感するのは難しかったようです。

この機会に歴史や博物館について興味を持ってくれたら嬉しいです。



明治～昭和期の資料の使い方を調べています